



目 次

○附属図書館の将来構想と基本的方向…………… 1	○研修・講習会等……………11
附属図書館長 近藤潤一	○図書館統計……………12
○北海道大学図書館講演会が開催されました…………… 9	○規 程 等……………20
○本学教官著作物……………10	○図書館委員会及び教養分館委員会名簿……………22
○会 議……………10	○人事往来……………23

附属図書館の将来構想と基本的方向

附属図書館長 近 藤 潤 一

<CCoD の配信と新世代情報システム>

わが館では、今回、HINES を通じてカレント・コンテンツ・オン・ディスクレット・アブストラクト付き版を配信することになった。すでに CD-ROM の LAN 経由の提供としては Medline, Biosis が各研究室の PC で 24 時間自由に検索できて、予想を超える利用率に達しているが、今回の CCoD は、接続端末数無制限の包括契約を結ぶことになって、これは日米にまたがって初めての契約だから、ISI 社の営業責任者が来日して価格交渉に当たることにもなった。テスト・ランを見ると、ディスプレイ上で通読もできるし、主題・著者別のアクセスも可能、さらに画面を開けば著者による抄録から、その連絡先まで居ながらにして確認できる。当然印刷もできるし、ダウン・ロードも可能である。従来なら、各学部図書室へ赴いて、あの縮小された冊子体の活字を拡大鏡で調べ、必要なものを探してコピーする、という手順が、大幅に簡略化される。かねてからの課題として追求してきた LAN 対応の一環としての学術情報の提供、全学コンピューター資源の有効活用による情報環境の整備は、さらに一段の飛躍を見ることになった。これは、図書館員の長年の夢の実現であり、ユーザーにとって多大の利便をもたらすとともに、二次情報のツールとしての冊子体の重複購入を削減し、また学部ごとにスタンダード・アローンのサーバーを購入するという無駄を事前に不必要とする経済効率のいい統合サービスでもあることになる。

この方向で館が次に計画しているのは、ケミカル・アブストラクトの電子版の配信であ

る。加えて、学部固有の研究分野の二次情報も次々に発信したいし、文系のDBやNEDなどの外国語辞書、大百科事典などの24時間配信もすでに視野に入っている。現在わが国の大規模大学で、ここまで情報環境の構築とその展開に努力している図書館は見あたらない。この実現には、当然日進月歩の通信工学の進歩が大きく寄与しているが、LAN対応の接続その他、わがシステム課の開発努力はすさまじいものがあった。その成果は、とりあえず論文のかたちで近く図書館専門誌上で発表される運びになっているが、それは今後しばらくは、北大モデルのマニュアルとして、他大学に裨益するところが多いものと確信している。

しかし、今後の課題として、既製ソフトの購入と配信の段階は、できるだけ早く脱して、各大学の個性に立脚した多様なDBを構築し、かつ発信するところまで到達しなければならない。本学では、その試みのひとつとして、マルチ・メディア対応の北方資料室資料のDB化に着手することとしている。すでに科学研究費の補助も決定したから、とりあえずは文字資料のDB化に着手するが、資料の本質からすれば、写真・古地図・風俗画・古文書・蠟管録音音声などを組み込んだ、映像・画像・音声の複合したDBでなければ十分効果的ではない。この方は一連のイメージ処理装置関連機器を入手しなければ不可能であるが、その概算要求は提出済みである。近い将来の実現を期しているが、これが成功を収めれば、この分野では学術情報の最先端をゆく情報の発信という面で、重要な先駆たり得るだろう。

次に、館は、次年度から、従来の検索・図書業務システムを一新して、次世代情報システムと言われる「ワークステーション・ネットワーク・システム」に転換することを決定した。これも全国立大学図書館では最初の挑戦である。従来のホスト・コンピューターによる中央処理機構は、すでに他の追随を許さぬ情報量の蓄積や、利用率の驚くべき増大によって処理能力が限界に近づき、応答速度の鈍化を来しつつある。その上、単なる目録検索と図書館日常業務なら果たせても、今後新たなDBの構築をはじめとする多様なサービス展開は、現行システムの能力では果たせない。それをにらんで、図書館が創意工夫を凝らして挑戦すべき課題を載せられる高能力の情報システムを整備する必要が生じたのである。それに、いち早く利用者本位の検索システムを構築し、当初から端末100台体制のフル稼働に成功し、かつケース2方式の入力によるカレント入力から遡及入力体制を整えてきたわが館も、いまでは端末画面が陳腐化し、機器自体も老朽化しつつある。これをより高次に、かつユーザーフレンドリーなグラフィック・インターフェイスに転換していかなければならない。このために、ワークステーションの分散配備によってシステム機能を飛躍的に高め、LAN対応の豊富化と相俟って学内学術情報環境の飛躍的向上をはかろうとするのが今回の意図である。このシステムの導入によって、図書館の情報システムは、単なる目録検索から各種サーヴィス機能の拡大を可能とする新システムへの転換を遂げることになるのである。これはまさに「新世代」の名に恥じない劃期的転換と言って過言ではない。

そればかりではない。このシステムには、将来の学術情報流通システムに向けての遠大な夢が秘められている。向後、各大学図書館がシステム転換を果してゆくなれば、そして遡及入力を果してゆけば、同一システム間のネットワークングによって、相互の図書情報を共有し得る体制が実現してゆくことになるだろう。われわれの遠い目標は、まず国立大学図書館全部を組み込んだバーチャル・ライブラリーの構築にはかならない。新世代システムは、今後とも技術開発の進展によってますます洗練され、淘汰され、ダウンサイジングも進行するだろう。各大学図書館間の標準化も急速に進むものと予想される。それは、高次元システムの共有とともに、書誌所在情報の共有に進まざるを得ないのである。知的共有財産の形成と共同所有は、新

世紀の研究教育機関に課された不可避の使命でなければならない。わが館の印する第一歩は、そんな未来への第一歩であり得るであろう。

米国の大規模図書館は、すでに各分館レベルでも、学内蔵書のみならず、提携する他地域大学図書館のDBを覗ける外部検索専用端末を配備している。検索画面はまことにカラフルで操作も簡略である。これも蔵書数500万前後の図書館が、すでに70%は遡及入力を終えているから意味があるのであって、わが国のように大規模図書館の遡及入力事業がこれから本格化が期待されるという状況では、かなり遠大な目標であるには違いない。その中ではわが館が全学の理解と支持の下に、140万冊弱、全蔵書の60%の遡及入力を達成しているのは、現在ではあくまでも突出した事例に属する。それに、米国の場合は、学内のコンピューター資源の結合から多数の学部LANが配備され、それが統合されて全学LANに成長するというというのが通常の過程であったようである。しかし、わが国の場合は、一挙に全学LANを敷設して、後でその積極利用を考えるという、ある意味で政策主導型の施策が先行した。これは後発館の有利さを生かした効率的な基盤整備の一形態であるが、反面、LANに載せるべき情報量が依然として貧困であるという現状は解消されていない。

しかし、この面での充実を推進するためにも、まずは新システムによる展望を切り開いてゆくことが不可欠である。このシステム自体は、すでに学術情報センターの研究陣が研究開発を続け、われわれもその指導と援助を受けながら立案したものである。これに関連して付言したいことが二つある。そのひとつは、われわれもまた、今後の文教行政面に、政策目標として導入されてもおかしくないシステムモデルを構築しようと意図してきたことである。図書館専用コンピューターの国立大学への配備は、'93年度をもってほぼ終了する。次の政策目標は当然中規模大学へのLANの敷設と、それを核とする電子化学術情報流通システムの構築、いわばエレクトロニック・キャンパス化の推進であろう。その方向での自力解決の一形態を提案しつつその政策化を訴えるのが、大学本来の主体性というものであろう。予算配分を懇願し、その配当がなければ容易に断念するという虚弱体質を払拭することは、我々にとっても必要だったし、現にますます必要となっているのである。第二に、われわれの館は、メインライブラリーを中心に、全部局図書館乃至図書室を結ぶ全学図書館システムが、活力に富んだ全学協力体制を維持できている。ここには学部の自治による壁がほとんど存在しない。それは全学LANへの対応を容易にしているし、館員の高い使命感による連帯の土壌にもなっている。現に、140万冊に迫る蔵書DBは、非常勤の遡及入力班の作業を包み込んだかたちで館員が積極的に遡及入力が続けている結果であり、土曜開館問題への対応も、館員の自発的な意志によって機械を動かし、開架はもちろん書庫利用、書庫内図書の機械貸出も行っている。それらのサービス業務を伴わない閲覧室の開放を、わが館員たちは真の「開館」とは認めない、という点で一致している。わたしは、この使命感・責任感を貴重な専門家の誇りから出た大切な結論であると信じ、かつ感謝している。

さらにいえば、先に触れたように、図書館の情報システム化は、当然新しい大学全体のエレクトロニック・キャンパス化にとって、その中核基地の位置を占めるものでなくてはならない。現在、本学においても大学改革の基盤整備としての電子情報化が全業務に及ぶ規模で検討され、その早期移行が図られている。その中で、館は現在改革の先駆的役割を担い、現に積極的にその任務の一半を果たしつつあるといえるだろう。そのことについて、全学の理解と支援は、急速に高まってきている。「図書館は変わりましたね」という声と一緒に「図書館員が変わりましたね」という声を何度も聞いた。その意味で附属図書館及び各部局図書室の果たした

つある新しい役割に関して、全学の関心がとみに変化してきていることは、まことにうれしいことである。図書館は、今後ますます、全学学術情報流通システムの中心的ゲートウェイとしても、またより広汎な研究教育支援システムの中心としても、新たなステータスを獲得してゆかなければならないし、現にその歩みをたどっていると確信している。

<将来構想——「学術情報総合センター」と完全自動書庫格納の文系図書館>

改めてトフラーの「第三の波」を持ち出すまでもなく、われわれは情報化社会の到来による人類文明変革期の只中にいる。情報の所有は一国の政治制度の虚構を崩壊させ、その平等な所有は、やがて人類社会における知のパラダイムを更新し、さらには新しい様態における知の体系的統一による価値観対立の解消に道を開くかも知れない。その中で、学術情報の集積・流通・発信の最大拠点であることが期待されている大学は、当然みずからの知的生産の情報システム化を推進しなければならない。現在、北海道大学が取り組んでいる改革の一つの目標は、学部教育全体を通じて、学生個人の創造的価値に重点を移した教育体系の創造であり、それを支援する全業務の情報システム化である。これは教育体制のパラダイムを大きく変動させることを意味している。

学術情報の受信はもとより、おそらく将来の発信形態も、マルチメディアによる発表が常態化する時代が訪れることになるだろう。いわば「知」の形態の上にも重大な位相の変換が生ずると予測される。

そうした予見のもとに、昨秋の日米大学図書館会議の共同コミュニケは、図書館の役割について「迅速な情報通信、データベースへの多様なアクセス、並びに学術情報の円満な交換を可能にするキャンパス情報基盤の整備が進む中で、情報資源ネットワークのゲートウェイとしての図書館が担う中心的役割が認識されるべきであり、またその役割が強化されるべきである。」と規定している。

この基本方向に関しては、かつて本学図書館委員会は「理系分館検討小委員会」を設置し、貴重な報告をまとめた中で、この分館が果たすべき機能として、(イ)境界領域、共通領域の図書・雑誌類の収集調整 (ロ) 科学・技術関係の参考調査機能 (ハ) 情報センター機能 (ニ) 複写センター機能 (ホ) 異分野の基礎的学習用図書館機能 (ヘ) 保存図書館的機能を挙げている。この構想は、実現の前提となるべき各段階の合意が得られず、学部図書室の再編成を含む人員・業務の統合に関しても支持の空気が得られなかったが、ここでいう「情報センターの機能」について言えば、LAN 敷設以後、現在の図書館がことに自然科学領域で次第にサービス機能を高めつつあることは周知のとおりである。しかし、図書館が「情報資源ネットワークのゲートウェイ」に成長し、かつ全学情報流通システムの中心的役割を期待されている現状に照らせば、現在の役割は依然として甚だ不十分であることは論を待たない。かつ、同小委員会報告が「長期的展望としての提言」で触れた「北海道大学中央情報センター」設置案こそ、現在その必要に迫られている緊急課題であるというべきであろう。

すでにこの方面での先発大学では、慶応義塾大学湘南藤沢メディアセンターが、図書館・計算機センター・AV スタジオを統合し、学内の全施設に配置されたワークステーション・ネットワークシステムを想定した「研究教育支援サービス」の構築を目指している。ここには、教材情報、講義情報、図書館情報、実験情報、統計情報、計算機情報などの教育支援情報から、教材作成、回答分析、成績管理、出欠管理、電子出版サービスに至るサービス項目を想定、研究支援についても同様の項目を立て、それらの関係をマトリックスに整理する試みを進めている。あるいは、大阪府立大学は「総合情報センター」を新設、ここでは、図書館情報機

能、情報・通信の処理管理機能（情報処理教育を含む）、生涯学習支援機能を一元化している。この方向は、現在の大学審議会、学術審議会答申の示唆するものでもあって、事実、あり得べき包括的情報システムを構想すれば、海外の諸大学で設置している「コンピュータ・センター」を核とした、大学情報システムの統括機関を設置するなかで、図書館の情報基地機能も全面的に編入されることが望ましいのである。

そこから導き出される将来構想については、すでに、館員による「図書館将来像検討委員会」が検討を継続中であり、その一部は中間報告の形態で発表されている。しかし、この検討は新しい理念の探求から、将来の建物内部の細案に至る詳細なものになることが予想されるから、その完成にはなお相当の時日を要することになろう。そのため、激変も予想される文教財政の現実に対処すべく、委員会とは独立に目下、部課長を中心に相当長期にわたって短・長期的展望に立つ将来構想を検討中である。それを私なりに簡略に示せば、次のような輪郭になる。

(1) 将来、キャンパス中心部に、北海道大学学術情報総合センターを設置し、図書館の情報システム及び本部機能を統合する。それとともに、全学教育科目のための学習図書館、自然科学分野の境界領域・共通領域のための学習図書館機能を付与する。また情報処理教育機関としての機能をも付与し、学内外の人材育成を含む全学情報処理教育設備の一環たらしめる。情報面では可能な限りの各種ソフトを HINES 経由で提供し、また独自 DB を構築し、配信する。ここでは大型計算機センターとの部分、あるいは全面的な業務統合を前提とした全学コンピュータ・センター組織を確立することが望ましい。また、多目的ホールを備え、各種学術文化目的の会議、イベントに供することが必要である。

(2) 現在の図書館本館は、人文・社会科学系専門図書館に転換し、文系各部局の図書業務を統合する。同時に積層書庫部分を取り巻く空間を、コンピューター制御による完全自動書庫に改造、文・理を併せ、かつ道内各国立大学をも対象とする保存図書館機能を付与する。ここでは、情報システムと結合した完全自動デリバリー方式によって、図書資料の配送に十全を期するとともに、維持・管理の徹底的な省力化・省資源化が追求される。

(1) の建設はおのずと長期的展望で捉えなければならないだろう。この建物は、本学のシンボルタワーともなる部分を有する構造であることが望ましいだろう。このセンターの建設は、実質上は新構想によるメイン図書館の新築を意味するが、そればかりではない。上述の意味で、学術情報流通システム、研究・教育支援システムの新しい中枢機関として多様な機能を統括する施設でなければならない。同時に、全学コンピューターシステムの研究開発、管理保全の一元化とその集中を実現するものであるべきだろう。それは、現在、図書館に期待されている、高度化された情報流通手段を駆使した学術情報発信基地としての機能を、いっそう集約するとともに、エレクトロニックキャンパス化推進の中枢組織としての役割を付与するものである。

この施設が完成すれば、ひとつにはかつて提唱された「理系分館」の機能は、より高次に集約代替されることとなる。また、将来、全学共通教育のための高度にインテリジェント化された教育環境施設が、同じくキャンパス中心部に設置されれば、当然その学習図書館機能も兼ねることになる。

(2) の完全自動書庫は、すでに図書館では研究開発の自信を得ている。わが国では最初の自動管理物流システムである。端末で所蔵図書の縦覧もできるし、コマンドすれば約 70 秒で、当該図書資料収納のコンテナがカウンターに配送される。5 億円ほど投入すれば 50 万冊収納

可能の設備が稼働できる。この実現は、現在の書庫のオーバーフロー状態を考えれば、緊急の短期的目標になるだろう。

人文・社会科学系分野では、依然として刊本の資料的価値が高い。また活字出版がなお主要な媒体でありつづけることに疑いはない。そのため、刊本を中心とする伝統的な図書館サービス機能の全学拠点としての比重は、決して低下することはないであろう。ただし、この機能は、あくまでも、デリバリーシステムの効果的運用に裏付けられていなければならない。情報の発信は、オリジナルな図書資料の研究室への配送をもって完結するのである。

ただし、現在の附属図書館は、すでに収容力の限界に達し、かつ貴重資料の保存設備もきわめて貧困である。そのため、文系部局との図書及び図書業務の統合も、関連部局の強い要請にも関わらず、にわかに実現できる状態にない。この根本的解決のためには、(1)を前提とする(2)の早急な改造が直ちに必要である。これは、何度でも繰り返し力説しなければならない当面の課題である。館としても文教行政当局乃至事務局に実情を訴え、かつ提案し、すでにそれ相応の理解を得ているところであるが、なお早期の実現のため全学の理解と強力な支援を切望してやまない。

この試案は、先に述べたように、正規機関によってオーソライズされたものではない。しかし、「図書館将来像検討委員会」の志向する基本方向とは、一致する方向で、絶えず意見交換に努めながら設定された目標である。むしろ当該委員会によって、多少の変更はあり得るにせよ、今後さらに専門的検討によって細部が決定されたかたちで提案が行われる性質のものである。図書館の基本政策は、現在、おおむね上述の方向に添って打ち出されていると承知願いたいのである。

<焦眉の急——直面する困難点>

平成5年度図書館関係予算では、本省学術情報課の甚大な努力によって、初めて自然科学研究科等のための特別図書購入費の費目が立てられることになった。三十数大学を対象とするLANの設置計画とともに、大学図書館全体にとって、大きな朗報である。この有効利用は、自然科学系部局への情報サービス拡充を核とする情報環境改善にも新たな財源をもたらし得るものとなるだろう。館でもすでにその計画案の策定を準備しているところである。

しかし、これら電子図書館化計画の顕著な進展とは別に、附属図書館・教養分館、ひいては部局図書室は、いずれも書庫の狭隘と設備の老朽化に苦しめられている。附属図書館書庫の狭隘はもはや危機的乃至破局的な状態である。このため、館ではすでに二次にわたるプロジェクトチームを組織し、館内大改修計画を策定した上で種々実現に努めてきたが、いまだ着工に至らない。現在、おおまかに言えば、図書の自然増に対処するだけで、あと数年で限界を超える。そのため、いちはやく重複図書に関する不用決定並びに廃棄処分に関する規定を定め、情報サービス課の超人的努力によって、雑誌を中心に書架を空け、書庫内資料の整備と再配置を進めてきた。それには学内全雑誌がすでに入力済みであるゆえに重複調査が容易であるという本学の卓越した条件に助けられているけれども、それにしても辛苦を伴う作業であることに変わりはない。改修は、目下、四階の自由閲覧室を解消してここに全課の事務室を集中するワンフロアシステムを採り、従来の分散されていた各室を挙げて書庫に宛てようとするコンセプトが中心になっている。しかし、そうしたところで、寿命をさらに数年延ばすだけで、懸案の文系学部との統合を部分にでも進行させれば、すぐ限界に達してしまうのである。

事情は教養分館でもほぼ似ている。ここでは昭和44年建築部分の甚だしい老朽化によって、正面玄関部分の全面改修、暖房機器、電気機器の改修を必要とする保安面の不安さえあ

り、屋上からの漏水にも頭を悩ませなければならない状態である。当然書庫の狭隘は次第に差し迫ったものとなってきており、教養部・言語文化部からの使用済み返却図書の収容、文学部を中心とする人文系学との統合による引き取り図書の増加によって、ほとんど収容能力を失う寸前の状態である。現状では教養部文系各研究室は図書の氾濫によってほとんど恐慌状態に陥り、刻々と機能麻痺に近づいている。このことから、図書統合の速やかな進展が切実な要求になっているが、現状ではそれは物理的に困難な状態である。

海外の大学図書館は、多く、広大な規模の地下書庫を持っている。ワシントン大学は、ゴシック様式の美しいメイン図書館と、アンダーグラデュエート図書館が鍵型に配置され、その一角は敷石で覆われた広場になっている。その広場の地下はことごとく書庫である。UBC 図書館は時計塔を持ついかにも英国風の建築で、メインストリートとの間に広い前庭を持ち、横手にやはりアンダーグラデュエート図書館を配するが、その前庭から主要道路まで、ことごとく地下書庫を置いている。そのため、メインストリート中央部には、貝殻状の抽象彫刻を思わせる通気孔がつたっている。しかし、本学の場合は、地盤に問題がある。文教施設関係は、この問題に関しては、書庫の狭隘に対して増築を進めるだけなら、将来はキャンパス全部が書庫になってしまうのではないか、という決まり文句で対応するのが常である。別の解決法が求められているのである。

確かに将来を懸けて言うならば、記録媒体は多様化し、同時にコンパクト化するだろう。だが、それがただちに活字媒体の消滅につながるとは言えない。まして刊本形態の文化財の保存・蓄積と効果的な流通は、将来ともに図書館の基本的任務である。そのための賢明な提案として、館は、前述の完全自動書庫の設置を訴えているのであるが、その実現まで、依然として危機的状況は続くことになる。当面はその都度の弥縫策を講じてゆくほかはないかと思うと、いささか暗然たる思いに駆られざるを得ない。

事のついでということがある。図書館は、新たな情報環境の下で、各種サービスを展開すればするほど、当然ながら利用者のニーズを喚起し、業務を拡大することになる。省力化が進行するだけ、それとともに新しい仕事が増える。かつ館員の専門能力はますます高度化を要求される。

ほんの一二の例だけ挙げておこう。図書館間のネットワークキングが進んで来た現在では、館相互の高速ファクシミリ網による通信、複写転送のシステムはフル稼働状態であるのはご多分に洩れないが、それとともに書物の貸借も盛行している。それも NACSIS の開発した ILL システムで完全に電算化した依頼通信が行き交っている。業界では奇妙にも「現物貸借」と言っている。その「現物」だが、わが館は突出した蔵書数を有するわけではないが、NACSIS の DB に登録した情報が特段に多いし、検索画面は北から表示されているから、受付件数は群を抜いて多い。大学図書館ではおそらく全国一である。なかにはかなり安易な依頼もあって、そこは適当なガイドラインを設定して断わることもあるが、それでも業務量は膨大なものに達する。他大学では外注でまかなっている館も少なくないが、わが館では相互利用掛定員内二人非常勤一人で担当している。通信はリアルタイムになっても、依頼された書物の「現物」を部局から集め、荷造りして毎日山のような小包を発送する仕事かなりの労働であることに変わりはない。掛は必死に持ちこたえているのである。この仕事が、将来のバーチャルライブラリーの夢につながる一歩だと自覚しているからである。

北方資料室。この収蔵資料の貴重さは改めて言うまでもない。その形成に前主任の A 専門員の情熱が関わってきたことも知る人は多い。A 氏の退官時、資料整理の必要だったものに

は、北大沿革資料 (個人資料・事務局廃棄資料・写真資料等)、高岡熊雄旧蔵資料 (大政翼賛会・北海道開発計画関係資料等)、疋田豊治写真コレクション、「北方関係洋書目録」「札幌農学校文庫目録」「場所請負旧家文書目録」等の刊行その他多くの手掛けるべき仕事が残った。その作業は現在の Y 専門員を中心に精力的に継続されているが、そこはやはり資料を知悉している A 氏の協力を得られるに越したことはない。そのため、さらに三年だけ整理作業に協力していただくこととして現在に到っている。それでも、整理の完成にはなお若干の歳月を要することだろう。ここでも高度の専門知識を有する館員の育成と増強が望まれるところである。

まして、本学の誇るスラブ研究センター所蔵の大型コレクション目録のマルチメディア DB の構築など、いくらでも人手と金を要する地味な仕事が、まさに山積している。そのための人材の確保、スタッフの充実は、今後ますます必要となることだろう。図書館は、各部署で、甚だしい人手不足に悩まされつつ、なお健闘しているのである。この問題は、やがていずれかの時期、日本の大学が真の学術的中枢として国際社会に十全な貢献を果たすための財政的裏付けを得、ひいては研究支援スタッフの充実が今以上に急務と認識された段階で、情報センタースタッフの増強というかたちで優先的に解決されることになるだろう。そのためにも館はその機能の高度化、豊富化と併せて、スタッフ自身の将来像を開拓しつづければならないだろう。

日本の大学図書館は、わたしの判断では、開発途上国段階にある。施設・設備の遅れもさることながら、大学構成員の図書館概念自体もまだ十分旧態を脱したとは言えないし、図書館のステータスも十分高いとまではまだ言えない。図書館は、一方では学術情報の集積・整理・発信の中枢として、とりあえず二次情報を発信しながら学内全コンピューター資源とのネットワークを形成し、離れかかっていた自然科学系各部局の関心と需要を回復し、あるいは密結合情報環境を形成して新たな信頼を築き、研究者が研究室を離れることなく、WS や PC を通じて必要な情報を入手できる環境を形成したい。一方で、人文・社会科学系部局との統合を推進して、知的文化財の共有とその検索及び二次情報の配信によって、かつての個人別研究文献ノート作成の労を離れ、全研究者に情報の平等を保証できるようでありたい。そのとき、図書館員は、不可欠の研究教育支援スタッフとして立ち現れることになるだろう。

それまでの道中、図書館は、学術情報流通システムの中核として育つと同時に、伝統的図書館の機能を守り、かつ新システムに溶けこませ、一步ずつ着実に歩む以外に当面の方途はないだろう。その中で勇気を失わず、やがて来るだろう文教行政の大量資本投下に備えて具体的な将来計画を、館員自身の手で完成させ、かつ更新しつづけることが必要であると、わたしには思われる。それはあまりにも消極的な発言であるだろうが、想像力を取り去って残る当面の現実はそのようなものであろう。しかし、ロングウェイの視野に立ちさえすれば、図書館の将来像は、途中は困難に満ちながらも、ますます重大な役割を担わなければならぬものとして描き出されるし、それは将来の知の光明世界において、その中心に位置していることは疑いないところであらう。

〔付記〕 この稿提出のあと出席した国立大学図書館協議会の理事会、および 6 月の同総会において、次世代システムの研究を含む図書館情報システム特別委員会が設置されることとなった。各館間に問題意識の共有と具体化の作業が進展することは、われわれの館としてもよろこばしいことである。われわれの館が委員館の一員に指名されたこともあり、今後、求められれば可能な範囲で協力することとなるであらう。

◆ 北海道大学図書館講演会が開催されました

○ 「UNIX による図書館システム」

講師： 学術情報センター 大山敬三氏

開催日： 平成5年2月23日

この講演では、最近の情報処理の一般的な傾向から始まり、ワークステーションが汎用機（現在の図書館のホストコンピュータ）に比べてどういう利点があるかについて様々な面からお話がありました。

北大図書館の次期システムとしては、ワークステーションと LAN を使ったシステムが有力視されており、また、学術情報センターでは UNIX 版 UIP が開発されています。このような状況のなか、我々図書館員はワークステーションや UNIX について最小限の知識を持つことが必要となっていますが、その意味からも今回の講演は非常に有意義なものでした。

○ 「21 世紀を展望した新しい大学情報センター構想について」

講師： 大阪市立大学 姉川宗夫氏

開催日： 平成5年3月1日

講演は、まず大阪市立大学附属図書館の現状および図書管理体系について説明がなされ、その中で、問題点や現状認識を明確にされた。そして、図書館および学術情報センター建設計画の経過について説明がなされた。特に図書館将来計画策定のための委員会の変遷その役割、また、それに伴う構想・計画の変更があったことを詳しく述べられた。

学術情報総合センターの具体的な概要および基本理念については、「学術情報総合センターは大阪市立大学における情報化に関連する附属図書館を中心に、計算センター、および一般情報処理教育部門を総合的かつ有機的に結合して、高度情報化社会の進展に対応する教育・研究を支援し、新しい情報中枢となる複合施設」としている。また、その役割を「国際都市大阪の学術・文化の創造・発信・交流の中核拠点」および「キャンパスのインテリジェント化の中心となる施設として建設するもので、新しい市立大学のシンボルとなるものである。」としている。

次に計画の目標と内容について説明があり、そこでは、サービス、学術情報システム（ネットワーク）の形成、環境、管理・運営組織、建物についての具体的な内容に触れた。建物の概要は、延床面積が約 37,000 m²、うち図書館部門が約 33,000 m²、地上 10 階、地下 4 階で、総工事費は約 290 億円としている。図書館部門の施設は、閲覧座席が約 1,200 席、図書収容能力が 272 万冊、そして開架閲覧室および参考図書室（2, 3, 4 階）に 22 万冊、雑誌センター（地下 1 階）には、バックナンバー 40 万冊、新着雑誌 5,000 タイトル収容し、5 階には、AV & ニューメディアセンターを設け、これらを重点施設としている。開設は平成 8 年春の予定で、学術情報総合センターは、国内の大学としては最大規模の図書館となる。

最後に今後の検討課題および具体化事項として、① 図書館トータルシステムの構築、② 新図書館についての対応、③ 重点施設の具体化と準備、④ 蔵書（120 万冊）の移転準備といった点をあげた。

◆ 本学教官著作物 (本館・分館受贈分)

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました。

〔本 館〕

○名 誉 教 授

和 田 謹 吾 遠きにありて (観白亭草叢刊 第9) 「私家版」 1993

○文 学 部

近 藤 潤 一 北の季寄せ 北海道新聞社 1993

○法 学 部

曾野 和明 (共著) 国際売買法: [本編] 資料編 (現代法律全集 60) 青林書院 1993

○経 済 学 部

富 森 虔 児 「市場」への遅れたためざめ (現代教養文庫 1449) 社会思想社 1993

佐々木隆生 (共編) 構造変化と世界経済 藤原書店 1993

○理 学 部

山本 玉樹 (編著) W. S. クラーク博士論文集 北海道大学理学部 1993

○工 学 部

越 野 武 北海道における初期洋風建築の研究 北海道大学図書刊行会 1993

○医 学 部

大里外誉郎 (編集) 医科ウイルス学 南江堂 1992

田 辺 福 徳 本と珈琲 私家版 1993

○言語文化部

小 野 米 一 北海道方言の研究 学芸図書 1993

〔教 養 分 館〕

○文 学 部

金子 勇 (共著) マクロ社会学 新曜社 1993

金 子 勇 都市高齢社会と地域福祉 ミネルヴァ書房 1993

近 藤 潤 一 北の季寄せ 北海道新聞社 1993

○言語文化部

小 野 米 一 北海道方言の研究 学芸図書 1993

附属図書館では、本学教官著作物をできる限り収集するようつとめております。今後とも、よろしくご協力下さい。

◆ 会 議

第151回図書館委員会 <平成5年3月18日(木)>

議 題

1. 平成6年度概算要求事項について
2. 北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システム接続利用に関する要項(案)について
3. 図書資料の不用決定について
4. その他

第111回教養分館委員会 <平成5年4月27日(火)>

議 題

1. 平成4年度教養分館図書費決算について

2. 平成5年度教養分館図書費要求額(案)について
3. 資料等選定小委員会の選任について
4. その他

第25回北海道地区国立大学附属図書館協議会 <平成5年4月21日(水)>

場所： 室蘭工業大学附属図書館

協 議 題

1. 北海道大学図書館職員講演会について
2. 平成5年度全国図書館大会について
3. 平成5年度目録システム講習会について
4. 次世代大学図書館システムについて
5. 「第40回国立大学図書館協議会総会関係」について
 - (1) 文部大臣等に対して特に要望すべき事項
 - (2) 総会の分科会で検討するための協議題
 - (3) 平成5年度理事候補館名及び所属部会
 - (4) 地区連絡館名
 - (5) 平成4年度地区協議会活動状況報告
 - (6) 当面の諸案件について

「学術雑誌目次情報データベース事業化計画」について
6. 次期当番校について

◆ 研修・講習会等

○北海道大学図書館オンラインシステム新任担当者実務研修

平成5年4月13日～4月23日 場所： 附属図書館

端末基本操作研修	4.13	13:00～16:30
受講者9名		
雑誌管理システム研修	4.14～16	9:00～16:30
受講者8名		
目録管理システム研修	4.19～21	9:00～16:30
受講者10名		
検索・閲覧システム研修	4.22	9:30～12:00
受講者8名		
図書管理システム研修	4.22	13:00～16:30
受講者4名		
ILL管理システム研修	4.23	9:00～16:30
受講者9名		

◆ 図 書 館 統 計

○ 平成 4 年度部局別蔵書冊数

(平成 5 年 3 月 31 日現在)

部 局 区 分	和 書	洋 書	合 計	備 考
附 属 図 書 館	538,079	428,354	966,433	法学部, 経済学部の一部を含む
教 養 分 館	124,852	76,151	201,003	言語文化部を含む
文 学 部	101,972	134,743	236,715	
教 育 学 部	77,913	29,353	107,266	
法 学 部	(72,442)	(129,204)	(201,646)	(附属図書館所蔵)
経 済 学 部	{(52,483) 28,130}	(29,071) 18,291	(81,554) 46,421	(//)
理 学 部	47,717	147,727	195,444	情報処理教育センター, 実験生物セ ンターを含む
医 学 部	65,438	93,302	158,740	附属病院, アイソトープ総合センタ ーを含む
歯 学 部	16,708	16,687	33,395	附属病院を含む
薬 学 部	5,823	15,894	21,717	機器分析センターを含む
工 学 部	176,682	144,619	321,301	
農 学 部	202,713	112,440	315,153	附属農場, 附属演習林を含む
獣 医 学 部	10,985	21,811	32,796	
水 産 学 部	77,034	48,886	125,920	
教 養 部	15,658	7,752	23,410	
言 語 文 化 部	(19,558)	(60,745)	(80,303)	(教養分館所蔵)
地球環境科学研究科	11,893	6,341	18,234	
低温科学研究所	7,468	17,495	24,963	
電子科学研究所	5,862	18,584	24,446	
免疫科学研究所	1,478	7,163	8,641	
触媒化学研究 センター	3,329	11,481	14,810	
スラブ研究センター	{(3,662) 1,098}	(50,670) 14,385	(54,332) 15,483	(附属図書館所蔵)
大型計算機センター	957	1,893	2,850	
事 務 局	1,824	156	1,980	保健管理センターを含む
医療技術短期大学部	22,704	3,468	26,172	
計	(148,145) 1,546,317	(269,690) 1,376,976	(417,835) 2,923,293	

○ 平成4年度年間受入： 図書冊数・雑誌種類数

区 部 分 局	図 書 受 入 冊 数							雑 誌 受 入 種 類 数						
	和 書			洋 書			合計	和 雑 誌			洋 雑 誌			合計
	購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他		購入	寄贈	その他	購入	寄贈	その他	
附 属 図 書 館	5,899	3,336	10,983	3,996	555	10,196	34,965	283	1,934	0	421	519	0	3,157
教 養 分 館	3,011	620	217	2,347	166	1,006	7,367	246	443	0	303	13	0	1,005
文 学 部	2,415	232	275	3,825	487	636	7,870	154	774	3	728	21	0	1,680
教 育 学 部	2,167	50	526	416	17	469	3,645	498	660	0	188	10	0	1,356
法 学 部	(1,168)	(772)	(384)	(1,979)	(312)	(1,475)	(6,090)	(146)	(335)	(0)	(344)	(49)	(0)	(874)
経 済 学 部	(1,738)	(51)	(0)	(1,500)	(64)	(0)	(3,353)	141	564	1	262	44	1	1,013
	0	0	1,254	0	0	786	2,040							
理 学 部	320	17	239	1,271	162	1,383	3,392	148	273	0	759	345	0	1,525
医 学 部	725	285	256	251	236	1,764	3,517	286	655	0	722	184	2	1,849
歯 学 部	344	29	277	129	9	515	1,303	145	176	0	219	50	4	594
薬 学 部	157	1	61	55	7	526	807	41	53	0	126	5	0	225
工 学 部	846	21	564	590	25	1,754	3,800	335	535	3	847	115	0	1,835
農 学 部	1,652	46	648	582	13	1,092	4,033	377	1,038	6	660	365	0	2,446
獣 医 学 部	134	1	24	130	1	256	546	46	49	0	122	68	1	286
水 産 学 部	644	0	591	64	0	978	2,277	214	691	3	276	463	1	1,648
言 語 文 化 部	(982)	(10)	(46)	(2,211)	(3)	(156)	(3,408)	(21)	(43)	(0)	(171)	(2)	(0)	(237)
地 球 環 境 科 学 研 究 科	300	0	76	168	0	290	834	43	81	0	125	36	1	286
低 温 科 学 研 究 所	59	0	104	93	0	442	698	25	396	2	105	226	2	756
電 子 科 学 研 究 所	30	0	21	192	0	357	600	29	120	0	103	10	0	262
免 疫 科 学 研 究 所	8	0	0	17	0	209	234	7	102	0	51	0	0	160
触 媒 化 学 研 究 セ ン タ ー	11	2	60	73	3	176	325	17	1	0	42	12	3	75
ス ラ ブ 研 究 セ ン タ ー	146	30	0	4,575	32	270	5,053	10	23	1	410	59	1	504
大 型 計 算 機 セ ン タ ー	13	0	0	113	0	0	126	36	33	2	52	0	0	123
医 療 技 術 短 期 大 学 部	1,072	61	216	146	0	77	1,572	149	106	1	62	3	3	324
合 計	(3,888) 19,953	(833) 4,731	(430) 16,392	(5,690) 19,033	(379) 1,713	(1,631) 23,182	(12,851) 85,004	(167) 3,230	(378) 8,707	(0) 22	(515) 6,583	(51) 2,548	(0) 19	(1,111) 21,109

- ・〔部局：集計単位としての部局〕附属図書館には法学部，経済学部，教養分館には言語文化部，理学部には情報処理教育センターと実験動物センター，医学部には附属病院とアイソトープ総合センター，歯学部には附属病院，農学部には附属農場と附属演習林，薬学部には機器分析センター，事務局には保健管理センターの分をそれぞれ含む。以下の統計においても同じ。
- ・〔その他〕は，雑誌を製本として受入れたもの，および管理換で増となったもの＝図書館の例では自然系バックナンバーのものとスラブ研からの「管理換」＝がほとんどである。

○ 平成4年度 附属図書館利用数

(開館 277 日)

区 分 部 局		開架閲覧室		書 庫			参 考	北 方	語 学
		館 外 貸 出		館内閲覧	館 外 貸 出		閲覧室	資料室	演習室
		人 数	冊 数	冊 数	人 数	冊 数	利用者数	利用者数	利用者数
学 生 所 属 部 局	文 学 部	3,219	6,150	8,775	1,085	1,795	684	92	222
	教育学部	617	1,355		201	316	105	38	
	法 学 部	3,568	6,521		1,454	2,278	224	16	
	経済学部	1,321	2,521		293	467	67	15	
	理学部	2,818	5,675		60	79	32	15	
	医学部	306	607		7	11	37	4	
	歯学部	265	486		1	1	4	1	
	薬学部	344	625		5	6	4	1	
	工学部	933	1,811		38	51	38	26	
	農学部	1,120	2,239		71	126	89	33	
	獣医学部	89	175		5	9	3	1	
	水産学部	6	23		0	0	2	1	
	教養部	6,585	12,785		593	839	327	123	
	研究所ほか	68	126		18	26	5	18	
	医療短期大	543	1,122		23	39	27	3	

区 分 部 局		開架閲覧室		書 庫			参 考	北 方	語 学
		館 外 貸 出		館内閲覧	館 外 貸 出		閲覧室	資料室	演習室
		人 数	冊 数	冊 数	人 数	冊 数	利用者数	利用者数	利用者数
院 生 教 官 職 員 学 外 利 用 者 (含放送大学)	院 生	3,652	7,283	2,435	4,621	13,685	1,533	219	10
	教 官	692	1,311		2,429	7,073		146	
	職 員	1,139	2,399		309	603		86	
	学 外 利 用 者 (含放送大学)	366	856	3,352	693	1,644	523	954	
利 用 者 合 計		27,651	—	7,328	11,906	—	3,724	1,792	232
利 用 冊 数 合 計		—	54,060	14,562	—	29,048	789 ¹⁾	2,047 ²⁾	227

注 1) 国連資料・OECD資料・EC資料・図書館学資料及び参考図書(一夜貸出)

2) 館外貸出冊数のみ。

3) 参考閲覧室の学内利用者は学生欄にまとめた。

4) 参考閲覧室、北方資料室、語学演習室の開室は248日

○ 平成4年度 文献複写・相互利用統計

I. 国内：附属図書館相互利用掛を経由して学外へ依頼した件数（国立・私立とも）

申込部局	附属図書館	文学部	法学部	教育学部	経済学部	理学部	医学部	歯学部		農学部	獣医学部
件数	54	17	307	1	115	22	0	2		17	8

申込部局	言語文化部	地球環境科学	低温研	電子研	触媒研	免疫研	医療短大	工薬	スラ研	大型	合計
件数	67	207	0	9	63	21	0	5	0	3	933

II. 国内：新方式（国立大学等図書館相互における文献複写）で各部局図書館掛が受付・依頼を行った件数

部局	附属図書館	文	教	経	理	医	歯	薬	工	農	獣医	水産	低温	電子	医短	合計
受付	1,429	334	129	0	1,641	1,338	318	493	931	1,387	529	570	94	94	72	9,359
依頼	728	202	176	0	632	1,186	217	436	899	481	562	515	18	161	42	6,255

III. 国外への依頼件数（参考調査掛）

英	米	独	オランダ	C I S	イタリア	フランス	カナダ	中国	その他	合計
167	146	32	3	121	5	13	5	3	35	530

IV. 図書館間相互貸借（相互利用掛） ○他館への貸出 796 冊 ○他館からの借用 233 冊

V. 附属図書館電子複写・マイクロ業務実績（館内分を除く）（相互利用掛）

複写室 申込者	件数 (件)	複写論文 点数 (点)	処 理 枚 数 ・ コ マ 数					
			総 数	内 訳				
				電子複写 (枚)	マイクロ フィルム (コマ)	マイクロ フィッシュ (枚)	引伸焼付 (枚)	リーダー プリンター (枚)
学 内 者	149	269	1,201	987	0	0	0	214
学 外 者	2,524	3,770	48,907	47,781	0	0	0	1,126
合 計	2,673	4,039	50,108	48,768	0	0	0	1,340

VI. 参考質問（参考調査掛）

所在調査	書誌調査	事項調査	利用指導	情報検索	合計
2,627	1,077	1,108	903	211	5,926

○ 平成4年度 教養分館利用数

(開館 270 日)

区 分 部 局	開 架 図 書 室 (館 外 貸 出)		語 学 演 習 室 (館 内 利 用)		ビデオ視聴覚室 (館 内 利 用)	
	人 数	冊 数	人 数	冊 数	人 数	巻 数
文 学 部	1,128	1,943	40	42	56	67
教 育 学 部	204	388	0	0	13	13
法 学 部	320	505	29	34	32	39
経 済 学 部	331	573	58	92	66	160
理 学 部	1,727	2,949	26	32	60	77
医 学 部	258	424	25	25	40	48
歯 学 部	75	131	0	0	11	13
薬 学 部	229	375	6	7	13	21
工 学 部	1,268	2,100	25	28	80	90
農 学 部	274	500	85	89	34	44
獣 医 学 部	162	326	8	8	24	31
水 産 学 部	7	19	0	0	0	0
教 養 部	21,476	35,598	574	615	1,900	2,145
研 究 所 ほ か	30	45	17	20	14	18
医 療 短 期 大	238	441	0	0	13	14
放 送 大 学	14	27	0	0	0	0
院 生	1,123	1,974	40	47	87	133
教 官	423	792	7	7	26	65
職 員	596	890	3	3	2	3
学 外 利 用 者	54	82	0	0	0	0
合 計	29,937	50,082	943	1,049	2,471	2,981

館外貸出・分類別

(教養分館)

000 総 記	8,721	500 純粋科学	18,368	雑 誌	818
100 哲 学	2,463	600 応用科学	2,477	そ の 他	141
200 宗 教	293	700 芸 術	1,538	合 計	50,082
300 社 会 学	4,035	800 文 学	6,018		
400 語 学	687	900 地理・歴史	4,523		

○ 平成4年度 HINES 及び電話回線による CLARK 利用統計

月	日 数	接 続 回 数		月	日 数	接 続 回 数	
		総 数	日 平 均			総 数	日 平 均
4	25	857	34.3	11	23	1,282	55.7
5	23	1,171	50.9	12	22	1,069	48.6
6	26	1,582	60.8	1	21	834	39.7
7	26	1,101	42.3	2	23	997	43.3
8	17	528	31.1	3	25	869	34.8
9	23	1,099	47.8	合 計	280	12,583	44.9
10	26	1,194	45.9				

注： 接続回数はラインモード (2回線), 画面モード (2回線), 及び電話回線 (1回線) の合計です。

○ 平成4年度 CLARK 統計

端 末 機 設 置		図書データベース登録数					雑誌データベース登録数			システムを 使用しての貸出		検索回数1台平均 ③	
部 局 名 ①	台数	年間増加	果 計 合 計	和 書	洋 書	学術情報 センター への所蔵 登録累積 (93.4.1)	所蔵雑誌 純 誌 数	受入雑誌 延べ誌数	製本単位	研究室	一般貸出	利用者用	業務用
附 属 図 書 館	24	17,377	281,969	166,571	115,398	211,016	22,681	2,467	272,829	15,018	77,635	42,035	10,583
週 及 入 力	8	29,434	② —	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,920
法 学 部	1	☆	☆	☆	☆	☆	☆	908	☆	10,943		11,400	
ス ラ プ 研	2	1,935	2,634	310	2,324	☆	☆	540	☆	1			5,012
経 済 学 部	2	☆	☆	☆	☆	☆	1,321	1,015	1,092	☆		12,731	22,449
教 養 分 館	8	6,598	137,544	97,248	40,296	78,911	1,303	1,009	12,079	8,391	50,082	44,884	5,922
教 養 部	1	△	△	△	△	△	△	△	△	6,733		3,981	
言 語 文 化	1	△	△	△	△	△	△	△	△	36,126		732	
文 学 部	6	6,170	94,176	40,948	53,228	64,966	3,396	1,686	10,630	104,711		14,447	6,815
教 育 学 部	3	2,519	44,147	36,092	8,055	29,490	2,420	1,417	5,482	21,714		16,339	7,724
理 学 部	5	1,324	37,420	14,482	22,935	25,148	4,095	1,800	12,968	42,950		16,492	6,126
医 学 部	6	2,879	42,118	25,920	16,198	27,219	4,616	2,209	16,983	17,022		16,826	4,541
歯 学 部	2	468	11,661	8,127	3,534	7,008	940	679	5,518	17,185		7,054	2,099
薬 学 部	2	233	5,277	3,966	1,311	3,451	389	265	4,374	2,166		11,486	5,744
工 学 部	7	1,814	79,389	58,287	21,102	37,183	4,242	2,393	19,267	74,156		26,945	4,004
農 学 部	7	1,822	56,731	42,900	13,831	31,868	5,686	2,532	12,775	54,149		22,434	4,799
獣 医 学 部	2	224	5,245	2,441	2,804	3,860	1,061	316	2,324	4,926		2,002	4,720
水 産 学 部	4	784	11,945	10,840	1,105	8,084	3,548	1,837	9,691	6,226		9,106	4,779
地 球 環 境	2	469	11,209	8,449	2,760	8,825	424	314	4,319	16,948		10,158	2,280
低 温 研	1	41	3,105	1,937	1,168	2,512	1,218	759	3,941	269		521	
電 子 研	2	197	7,333	3,595	3,738	5,436	519	157	3,057	5,150		6,539	1,968
触 媒 研	1	114	2,583	796	1,787	2,240	216	76	1,723	13		2,780	
免 疫 研	1	6	1,565	749	816	1,031	127	68	1,505	1,852		452	
医 療 短 大	2	1,427	18,604	16,126	2,478	12,895	402	326	3,188	5,708		13,410	3,824
教 育 大 学	12	29,174	101,325	90,083	11,242	—	11,535	—	—	101,394		2,436	
合 計	112 台	105,009 冊	955,980 冊	629,867 冊	326,113 冊	561,143 件	46,676誌 延べ誌数 87,984誌	22,773誌 純誌数 15,450誌	403,746 冊	535,656 冊	127,717 冊	20,396 2,530	6,378
												総合計1,187,310回	

注記 ①部局名＝附属図書館には大計センターの数を含む。☆欄は附属図書館に、△欄は教養分館に含まれる。スラブ研セ、経済学部で処理した資料は附属図書館に移管される。②週及入力の結果 540,899 冊は各部局の結果に含まれる。③蔵書検索画面で検索語を入力し実行キーを押した回数。

◆ 貸出回数頻度順リスト：平成4年度

○本館開架閲覧室

順位	書 名	著者・編者等	出 版 社	回 数	前 回
1	銀河英雄伝説 10巻	田中芳樹	徳間書店	75	1
2	生 化 学 上・下	L. Stryer	東京化学同人	57	2
3	有機化学 4版 上中下	R. T. Morrison ほか	東京化学同人	41	3
3	詳解力学演習 5版 上中下	後藤憲一ほか編	共立出版	41	—
5	有機化学 5版 上中下	R. T. Morrison ほか	東京化学同人	37	20
6	X線回折要論	カリティ	アグネ	34	6
7	機器分析のてびき 増補改訂版 4巻	塩川次朗ほか監修	化学同人	30	—
8	発生生物学：分子から形態進化まで	S. F. ギルバート	トッパン	27	—
9	講座日本歴史 12巻	歴史学研究会ほか編	東京大学出版会	26	4
9	Play the C: 初級C言語講座 上・下	林晴比古	日本ソフトバンク	26	—
11	債権各論 2版	藤岡康宏ほか	有斐閣	25	50
12	地震・火山・岩石物性	宮村操三編	共立出版	23	—
12	現代犯罪図鑑	別役実ほか	岩波書店	23	—
14	憲法 30講義	中村睦男	青林書院	22	19
14	憲法新編	佐藤幸治	青林書院	22	—
14	ここに地終り海始まる	宮本 輝	講談社	22	—
17	物理化学 3版 上・下	G. W. Castellan	東京化学同人	21	—
17	フランス社会運動史：アソアションとサンディカリズム	谷川 稔	山川出版社	21	—
17	フランス社会主義：管理か自立か	阪上 孝	新評論	21	—
17	固体物理学入門 5版 上・下	キッテル	丸善	21	10
17	Nucleic acids in chemistry and biology	G. M. Blackburn ed.	IRL Press	21	—
22	刑法概説 改訂版 2巻	大塚 仁	有斐閣	20	33
22	1848国家装置と民衆	阪上孝編	ミネルヴァ書房	20	—
22	資料フランス初期社会主義：二月革命とその思想	河野健二編	平凡社	20	—
22	物理化学 4版 上・下	G. M. Barrow	東京化学同人	20	12
22	詳解理論応用量子力学演習	後藤憲一ほか編	共立出版	20	—
22	遺 伝 学 2版 上・下	R. H. タマリン	培風館	20	—
22	演習憲法 新版	芦部信喜	有斐閣	20	24
22	詳解物理応用数学演習	後藤憲一ほか編	共立出版	20	—
22	微生物学 5版 上・下	R. Y. スタニエほか	培風館	20	29
22	薔薇の名前 上・下	ウンベルト・エーコ	東京創元社	20	24
22	配色事典 3巻 上・下	沢川由山ほか編	河出書房新社	20	—
33	基礎物理化学 上・下	ムーア	東京化学同人	19	22
33	注釈日本国憲法 上・下	樋口陽一ほか	青林書院新社	19	35
33	民法の争点	加藤一郎ほか編	有斐閣	19	—
36	心理学の基礎知識：補修と復習のために	東洋ほか編	有斐閣	18	—
36	ヨーロッパ：その歴史と精神	オットー・ブルンナー	岩波書店	18	—
36	量子力学	ディラック	岩波書店	18	—
36	大学演習熱学・統計力学	久保亮吾編	裳華房	18	—
36	憲 法	伊藤正己	弘文堂	18	—
36	ものかんづめ	さくらももこ	集英社	18	—
36	生 化 学 上・下	D. Voet ほか	東京化学同人	18	—
43	初等量子力学 改訂版	原島 鮮	裳華房	17	—
43	タンパク質の分離・分析法	泉美治ほか編	化学同人	17	—
43	生 理 学 2巻	入来正躬ほか編	文光堂	17	—
43	国際法概論 全訂新版 上・下	高野雄一	弘文堂	17	—
43	刑法概説 上・下	平野龍一	東京大学出版会	17	—
43	固体物理学入門 4版 上・下	キッテル	丸善	17	10
43	酵素反応機構	E. ゼフレンほか	東京大学出版会	17	—
43	遺伝子の分子生物学 3版 上・下	J. D. Watson ほか	化学同人	17	17
43	無機化学 4版 上・下	F. A. コットンほか	培風館	17	50
43	分子生物学 2版 上・下	D. M. Freifelder	化学同人	17	14
43	NEW 衛生公衆衛生学	糸川嘉則ほか編	南江堂	17	—
43	有機電子論解説：有機化学の基礎 4版	井本 稔	東京化学同人	17	—
43	教材憲法判例 3版	中村睦男ほか編	北大図書刊行会	17	—
43	会社法入門 2版	前山 庸	有斐閣	17	—
43	五番目のサリー	ダニエル・キイス	早川書房	17	—
43	新しい国際私法：改正法令と基本通達	澤木敬郎ほか	日本加除出版	17	—
43	カッコウはコンピュータに卵を産む 上・下	クリフォード・ストール	草思社	17	—

○分館開架閲覧室

順位	書名	著者・編者等	出版社	回数	前回
1	有機化学 5版	R. T. Morrison ほか	東京化学同人	265	—
2	基礎物理化学	ムーア	東京化学同人	127	—
3	新物理化学	W. J. Moore	東京化学同人	111	—
4	演習微分積分	寺田文行ほか	サイエンス社	108	21
5	細胞の分子生物学 2版	B. Alberts ほか	教育社	101	—
6	大学演習微分積分コンパニオン	山口正栄ほか編	学術図書出版社	100	—
7	詳解物理学演習	後藤憲一ほか編	共立出版	90	—
8	物理化学	P. W. アトキンス	東京化学同人	82	—
9	メイアン大学の化学 2版	メイアン	廣川書店	72	—
10	ウェイド有機化学	L. G. Wade, Jr.	丸善	70	—
11	電場と磁場	長岡洋介	岩波書店	63	—
12	地球の歩き方	地球の歩き方編集室	ダイヤモンドビ ック社	62	5
13	生化学	L. Stryer	東京化学同人	57	28
13	微分積分学: 大学課程 改訂新版	外岡慶之助ほか編	学術図書出版社	57	—
15	物理化学序論 3訂版	玉忠文一	培風館	55	—
16	分析化学実験 増補新版	日本分析化学会編	化学同人	52	—
16	遺伝子の分子生物学 3版	J. D. ワトソン	化学同人	52	—
18	遺伝子の分子生物学 4版	J. D. Watson ほか	トッパン	51	—
19	分析化学	長島弘三ほか	裳華房	49	—
19	微分積分学演習 改訂版	坂井英太郎	共立出版	49	—
21	分析化学	中埜邦夫ほか編	丸善	47	—
21	血族	シドニイ・シュエルダン	アカデミー出版	47	—
23	ゲームの達人	シドニイ・シュエルダン	アカデミー出版	46	—
23	真夜中は別の顔	シドニイ・シュエルダン	アカデミー出版	46	—
25	物理化学の基礎	P. W. Atkins ほか	東京化学同人	45	—
25	詳解物理学演習	後藤憲一ほか編	共立出版	45	—
25	物理化学	G. M. Barrow	東京化学同人	45	—
28	一般気象学	小倉義光	東京大学出版会	44	—
28	動物発生学	片桐千明	岩波書店	44	—
30	物理化学実験 6訂版	吉田卯三郎ほか	三省堂	43	—
30	時間のかさ	シドニイ・シュエルダン	アカデミー出版	43	9
30	窯変源氏物語	橋本 治	中央公論社	43	—
33	基礎生物学: 分子と細胞レベルから みた生命像	中村 運	培風館	39	—
34	プレート・テクトニクス	上田誠也	岩波書店	38	—
35	分析化学反応の基礎: 演習と実験	日本分析化学会編	培風館	37	—
35	基礎物理化学	今堀和友	東京化学同人	37	—
37	微分方程式・フーリエ解析	近藤次郎ほか	培風館	36	—
37	細胞の分子生物学	B. Alberts ほか	教育社	36	—
37	ノルウェイの森	村上春樹	講談社	36	1
37	線形代数演習と解法: 大学教養課程	三村 護	現代数学社	36	—
37	明日があるなら	シドニイ・シュエルダン	アカデミー出版	36	—
42	力学	戸田盛和	岩波書店	35	—
42	スタンダード線形代数演習	尾野寺毅ほか	共立出版	35	—
42	化学	Garrett ほか	東京化学同人	35	—
42	物理化学 4版	G. M. Barrow	東京化学同人	35	—
42	積分学コンパニオン: 大学演習	外岡慶之助ほか	学術図書出版社	35	—
47	化学反応の速度と平衡	佐藤弦ほか	裳華房	34	—
47	演習応用解析	州之内治男ほか	サイエンス社	34	—
47	分析化学	太秦康光	産業図書	34	—
47	新物理化学問題の解き方	藤代亮一	東京化学同人	34	1

◆ 規 程 等

北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システム接続利用に関する要項

(趣旨)

第1条 この要項は、HINES (学内 LAN) 及び公衆電話回線 (HINES 未設置施設に限る。) を介して研究室等のパソコンから利用する北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システム (以下「検索システム」という。) の接続利用の手続き等について、必要な事項を定めるものとする。

(接続利用者の資格)

第2条 検索システムを利用することのできる者は次に掲げるものとする。

- 1 北海道大学 (医療技術短期大学部を含む。) の職員
- 2 附属図書館長 (以下「館長」という。) が適当と認めた者

(接続利用申請)

第3条 検索システムを利用しようとする者は、別紙様式1による接続申請書により館長に申請しなければならない。

(接続利用の承認)

第4条 館長は、前条の申請について、別に定める基準により接続利用が適当と認められる場合には、別紙様式2による接続承認書を交付するものとする。

(遵守事項)

第5条 前条により承認された者 (以下「利用者」という。) は、次に掲げる事項を遵守しなければならない。

- 1 検索システムの安定稼働に対して、障害となる操作を行わないこと。
- 2 営利を目的として使用しないこと。
- 3 データベースの著作権を侵害しないこと。
- 4 その他検索システムの保全に係る障害行為を行わないこと。

(利用の停止等)

第6条 館長は、利用者が前条に定める事項に違反した場合は、その利用を停止し、又は利用の承認を取り消すことがある。

(届出)

第7条 利用者は、次の各号に掲げる事項の一に該当するときは、速やかに館長に届け出なければならない。

- 1 利用資格がなくなったとき。
- 2 利用しなくなったとき。
- 3 申請書の記載事項に変更が生じたとき。

(雑則)

第8条 この要項に定めるもののほか、必要な事項は、館長が別に定める。

附 則

この要項は、平成5年5月1日から実施する。

別紙様式 1

北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システム接続申請書

平成 年 月 日

北海道大学附属図書館長 殿

貴館のカレントコンテンツマルチ検索システムの利用について、「北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システムの接続利用に関する要項」を遵守し、次のとおり申請します。

〔申請者〕

申込 区分	☐ 新規 ☐ 取消	☐ 変更	部 局		資 格	☐ 教職員 ☐ その他 ()
フリガナ 氏 名				印	連絡先: 内 線:	
HINES 利用登録		申請者		ドメイン名:		別名:
		連絡担当者		ドメイン名:		別名:
接続端末設置場所:						

〔利用接続機器名等〕

パソコン名 (メーカー名, 型): イーサネットボード (メーカー名, 型) 及びアドレス: ハードディスク (メーカー名, 型): IP アドレス: その他特記事項:
--

〔図書 (担当) 掛〕

受 付	〔利用者 ID〕								
	図書 (担当) 掛名	掛長						印	
	参考調査掛	情報処理掛							

きりとり

別紙様式 2

北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システム接続承認書

利用 者 名		部 局	
利用 者 ID		利用開始日	平成 年 月 日
上記の接続申請を承認する 平成 年 月 日 北海道大学附属図書館長 氏 名 印			

平成5年5月1日

接続利用の承認基準について

「北海道大学附属図書館カレントコンテンツマルチ検索システムの接続利用に関する要項」第4条に規定する基準は、以下のとおりとする。

1. 利用データベース

CURRENT CONTENTS ON DISKETTE WITH ABSTRACTS: LIFE SCIENCES

毎週追加, 6ヵ月分蓄積

2. 接続の条件

接続機器を備えているか、又は承認後、速やかに接続機器を備えること。

3. 接続利用承認の範囲

ア 各部局図書室

イ 各研究室等

◆ 図書館委員会委員名簿及び教養分館委員名簿

○ 図書館委員会委員名簿

平成5年5月28日現在

部 局	官 職	氏 名	任 期	部 局	官 職	氏 名	任 期
文 学 部 教育学部 法学部 経済学部 理学部 医学部 歯学部 薬学部 工学部 農学部	館 長	近 藤 潤 一	平成6.3.31	獣医学部	教 授	神 谷 正 男	平成7.3.31
	分 館 長	片 桐 千 明	平成7.3.31	水産学部	〃	山 崎 文 雄	平成6.4.30
	事務局長	岡 林 隆	平成4.7.1~	教 養 部	〃	播磨屋 敏生	平成7.3.31
	学生部長	深 沢 和 三	平成7.3.31	〃	〃	篠 塚 寛 美	平成6.3.31
	教 授	河 内 祥 輔	平成6.3.31	言語文化	助 教 授	山 田 吉 二 郎	平成7.3.31
	〃	逸 見 勝 亮	平成6.3.31	地球環境研	教 授	西 則 雄	平成7.5.27
	〃	田 口 晃	平成6.3.31	低 温 研	〃	芦 田 正 明	平成7.3.31
	〃	石 坂 昭 雄	平成7.3.31	電 子 研	〃	狩 野 猛	平成6.9.30
	〃	岡 田 廣	平成7.3.31	免 疫 研	〃	上 出 利 光	平成6.3.31
	〃	大里 外譽郎	平成6.3.31	医 病	〃	松 田 英 彦	平成6.9.15
	〃	小 口 春 久	平成6.3.31	触 媒 研	〃	市 川 勝	平成7.4.30
	助 教 授	徳 光 幸 子	平成6.3.31	スラブ研	〃	原 暉 之	平成7.3.31
	教 授	新 保 勝	平成6.5.31	医療短大	〃	鈴 木 重 統	平成7.3.31
	〃	近 藤 敬 治	平成7.3.31				

○ 平成5年度教養分館委員名簿

平成5年4月1日現在

部 局	官 職	氏 名	任 期	部 局	官 職	氏 名	任 期
理 学 部 (生 物)	分 館 長	片 桐 千 明	平成7.3.31	理 学 部 (地球物理)	教 授	播磨屋 敏生	平成7.3.31
文 学 部 (日本文学)	教 授	篠 塚 寛 美	平成6.3.31	理 学 部 (科学史)	助 教 授	杉 山 滋 郎	平成7.3.31
法 学 部 (民法)	〃	白 取 祐 司	平成6.3.31	言語文化部 (独 語)	〃	佐 藤 俊 一	平成6.3.31
教育学部 (体 育)	助 教 授	矢 野 徳 郎	平成7.3.31				

◆ 人事往来

—文部省辞令—

○昇任

矢野 誠

山下 洋一

伊藤 秀治

○配置換

奥川 廣治

葛西 壽徳

○転入

<配置換>

鳥屋 部順

湯本 一義

○転出

<昇任>

三上 洋山

矢野 誠

山下 洋一

○併任

近藤 潤一

片桐 千明

○定年退職

石黒 克介

遠 昭二

—北海道大学辞令—

○採用

吉田 亘

渡辺 佳織

杉田 茂樹

中野 真弓美

高野 直樹

○昇任

川端 美明

○配置換

小野 宏

佐藤 清一

和田 章憲

岡本 憲吉

山口 國雄

木下 彰

黒田 泰行

高澤 勝

桑原 蔚

田中 一郎

竹鼻 敏治

福盛山 勉

武田 靖恵

大垣 雅子

情報サービス課課長補佐 (情報サービス課資料サービス掛長)

情報システム課課長補佐 (情報システム課情報処理掛長)

情報サービス課課長補佐 (理学部図書掛長)

情報管理課課長補佐 (文学部事務長補佐)

工学部総務課課長補佐 (情報管理課課長補佐)

情報管理課長 (東北大学附属図書館サービス課長)

情報サービス課長 (図書館情報大学図書館情報課長)

八戸工業高等専門学校事務部長 (情報管理課長)

旭川医科大学教務部図書課長 (情報サービス課課長補佐)

図書館情報大学図書館情報課長 (情報システム課課長補佐)

附属図書館長 (文学部教授)

教養分館長 (理学部教授)

情報サービス課長

情報サービス課課長補佐

情報管理課図書受入掛

情報管理課教養分館情報管理掛

情報システム課学術情報掛

情報システム課目録情報掛

教育学部図書掛

水産学部図書掛長 (情報管理課図書受入掛)

情報管理課会計掛長 (大型計算機センター共同利用掛長)

情報管理課教養分館情報管理掛長 (情報サービス課相互利用掛長)

情報サービス課資料サービス掛長 (情報サービス課教養分館情報サービス掛長)

情報サービス課教養分館情報サービス掛長 (農学部図書閲覧掛長)

情報システム課目録情報掛長 (情報管理課目録情報掛長)

情報システム課情報処理掛長 (情報システム課学術情報掛長)

理学部図書掛長 (情報サービス課参考調査掛長)

医学部附属病院管理課用度掛長 (情報管理課会計掛長)

農学部図書閲覧掛長 (医学部図書閲覧掛長)

獣医学部図書掛長 (情報管理課教養分館情報管理掛長)

情報サービス課参考調査掛 (情報システム課学術情報掛)

情報サービス課教養分館情報サービス掛 (文学部図書掛)

情報サービス課教養分館情報サービス掛 (農学部図書閲覧掛)

情報システム課目録情報掛 (情報管理課目録情報掛)

5. 3. 16

〃

5. 4. 1

5. 4. 1

〃

5. 4. 1

〃

5. 4. 1

〃

〃

5. 4. 1

〃

5. 3. 31

〃

5. 4. 1

〃

〃

〃

〃

5. 4. 1

5. 4. 1

〃

5. 4. 1

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

榆 蔭 (北大図書館報)

松 野 とも子	情報システム課情報目録情報掛 (情報管理課目録情報掛)	5. 4. 1
岸 本 一 志	情報システム課目録情報掛 (情報管理課目録情報掛)	"
片 野 慈 子	文学部図書掛 (医学部)	"
山 田 勉	理学部図書掛 (医学部図書整理掛)	"
井手上 恵 子	理学部図書掛 (情報サービス課参考調査掛)	"
船 木 俊 男	医学部図書整理掛 (農学部図書整理掛)	"
片 桐 和 子	医学部図書整理掛 (農学部図書整理掛)	"
長 野 美年子	歯学部図書掛 (薬学部図書掛)	"
土 田 京 子	薬学部図書掛 (理学部図書掛)	"
池 内 斐 子	工学部図書整理掛 (文学部図書掛)	"
山 本 将 子	工学部 (工学部図書整理掛)	"
畠 山 輝 敏	農学部図書整理掛 (情報管理課教養分館情報管理掛)	"
石 丸 恵	農学部図書掛 (理学部図書掛)	"
宮 本 慶 子	農学部図書閲覧掛 (教育学部図書掛)	"
坪 田 千江子	大学院地球環境科学研究科図書室 (大学院環境科学研究科)	"
田 中 道 子	低温科学研究所図書掛 (理学部)	"
○転 任		
齋 藤 壽美子	獣医学部図書掛 (医療技術短期大学部図書室)	5. 4. 1
○転 入		
＜転 任＞		
岡 田 潔	情報サービス課参考調査掛長 (北見工業大学附属図書館学術情報係長)	5. 4. 1
羽 川 明	情報サービス課相互利用掛長 (室蘭工業大学附属図書館学術情報係長)	"
菅 原 英 一	情報システム課学術情報掛長 (旭川医科大学教務部図書館情報管理係長)	"
柳 田 実	医学部図書閲覧掛長 (小樽商科大学附属図書館運用係長)	"
長 井 伸 一	文学部図書掛 (京都大学人文科学研究所)	"
大 家 克 己	情報管理課図書受入掛 (小樽商科大学附属図書館整理係長)	"
○転 出		
＜昇 任＞		
佐 口 英 二	室蘭工業大学附属図書館学術情報係長 (情報サービス課教養分館情報サービス掛)	5. 4. 1
片 山 俊 治	小樽商科大学附属図書館整理係長 (情報管理課図書受入掛)	"
富 本 壽 子	旭川医科大学教務部図書課情報管理係長 (歯学部総務課図書掛)	"
春 名 克 彦	北見工業大学附属図書館運用係長 (理学部図書掛)	"
金 子 和 恵	旭川工業高等専門学校庶務課図書掛長 (医学部図書整理掛)	"
＜転 任＞		
諏訪田 義 美	山形大学附属図書館情報管理課図書館専門員 (水産学部図書掛長)	5. 4. 1
町 田 由紀子	大阪大学附属図書館情報管理課 (獣医学部図書掛)	"
○定 年 退 職		
清 水 明	獣医学部図書掛長	5. 3. 31
久 田 ス エ	工学部	"
関 幸 子	低温科学研究所図書掛	"
—医療技術短期大学部発令—		
○転 任		
村 上 豊	医療技術短期大学部図書室 (情報サービス課教養分館情報サービス掛)	5. 4. 1

北海道大学附属図書館報「ゆいん」 通号 87 号

平成 5 年 (1993 年) 7 月 30 日 発行 発行人 附属図書館事務部長 金 井 孝

編集事務 山本幾夫・阿部勝義・岡田 潔・菅原英一・佐藤清一・午来信子・

岸本一志・佐藤依理子・松尾博朋・伊藤啓子・土田京子・柴森義晴

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 716-2111 (2967)

印刷所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 2 条東 12 丁目 231-5560・5561